

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

Una vacanza sabbatica ⑩

ワインの大地と歌姫

緋月 まや

ふと気づけば、我知らずまたあの人の歌を口ずさんでいた。その曲は、映画『ゴッドファーザー』の、誰もが耳にしたことがあるだろうあの有名なテーマソングなのだけれど、私にはもう、彼女の歌でしかない。大きな瞳と通った鼻筋がギリシャ彫刻のように美しい人だった。その歌声は妖艶で、少しハスキーで、情熱にあふれ、その切ない愛の歌に胸が締めつけられそうになった。あれからもう三年になるというのに、彼女はすっかり私の心に棲みついて、離れることがない。

海沿いの遊歩道から見渡す海は、まぶしいほど青い。しばらく歩いていると、古代ギリシャ建築を模した半円形の野外劇場が見えてきた。その中央には、楯と矛を持った戦いの女神アテナの銅像が立ち、レッジョ・ディ・カラブリアのまちを守っている。カラブリア州はブーツの形をしたイタリアのちょうどつま先の部分にあたる。レッジョは海に突き出した指先に位置し、直線距離でわずか3kmの対岸にはシチリア島が見える。『ゴッドファーザー』の故郷だ。カラブリアはシチリアと共に古代ギリシャの植民地として発展した。なかでもレッジョは、その中核都市のひとつだった。だから今でも、まちなみのところどころにその歴史を映す。そんなまちである人は生まれ育ち、歌を歌っている。

州最大の都市であるにもかかわらず、レッジョのまちに都会の喧騒はない。椰子の木が立ち並



【海辺のステージで歌う ADELA】

ぶのんびりとした南国である。フィレンツェからは高速列車で八時間もかかっただけあって、まるで別の国に来たかのようだった。私はエノテカを探していた。そもそも、この旅の目的は、カラブリアを代表する名ワイン Cirò(チロ)を味わうことにあ

った。古代ギリシャ人は、イタリアにワイン造りの技術をもたらした。彼らは葡萄栽培に適したイタリアを「ワインの大地」と讃えたのであるが、元々はカラブリアのことを指していたと言われる。古代ギリシャ五輪の勝者には、当時「クリミサ」と呼ばれていたまちで造られたカラブリア産のワインを授与したほどだ。ヨーロッパ最古のワインに数えられるこの五輪ワインこそ、チロの原形にあたとされる。海岸から離れ、商店街を歩いているとまもなく、こぢんまりとしたエノテカを見つけた。店構えに反して、中は地元のワインで充実していた。いろいろ種類はあったが結局、手頃な 6.9 ユーロ（当時約 850 円）のチロを購入した。



【カラブリアの名産チロ／唐辛子がまちなみを彩る】

夏の日には長い。気づかぬうちに、もう夕食の時間になっていた。宿に戻る道すがら、客入りのいいレストランの前を通りかかった。美味しい店に違いない。注文の列に並んで、唐辛子をたっぷり利かせたペースト状のソーセージ「ンドウイヤ（nduja）」のパニーノをテイクアウトした。唐辛子の名産地として知られるカラブリアの郷土料理だ。宿に着くと早速、アルミ箔の包装を解いた。ピリッとした辛みが熟成された肉のうまみと絡み合って溶けていく。一口食べるたびに、炎天下を歩いて消耗したエネルギーが充電されていくようだ。そこでいよいよ、チロをいただく。カラブリア土着の黒葡萄ガリオップから造られる赤ワインだ。特筆すべきは、そのハーブにも似たスパイシーさだった。ンドウイヤの辛味に臆しない存在感がある。ピリ

辛料理はワインと合わせるのが難しいのだけれど、なるほど、地元の食べ物には地元のワインが合うというイタリアの食の法則を確認できた。

それにしても、ンドウイヤとは、なんとも風変わりな名前だ。発音しづらくて、レストランで注文する際も非常に緊張した。フィレンツェで暮らしている限り、「ン」で始まる言葉にお目にかかることはないのだが、カラブリアにはあるのだ。南イタリアの言葉は、標準イタリア語とは随分と異なる。ギリシャ植民地時代を経てノルマン人、アラブ人に征服され、その後は長くフランス、スペインなど列強の支配下で言語的にもその影響を受けてきた歴史の所以だ。ナポリ語やシチリア語に到っては方言ではなく、ひとつの言語として扱われている。中部や北部のイタリア人には理解できないため、映画であれば標準イタリア語の字幕がつくほどだ。ちなみに、「ンドランゲタ（Ndrangheta）」はイタリア南部に巣食うマフィアのひとつで、カラブリアを拠点とする。まさに『ゴッドファーザー』の世界である。

このイタリア南部の出自にこだわり、その言葉で歌を歌い続けている女性がいると聞いたのは、翌日のことだった。おしゃべり好きで人のいい、宿泊先のご亭主が教えてくれたのだ。こうして私は、あの人——アデーラ(ADELA)と出会った。広々とした海辺のレストランの中央に、簡素なステージがあった。南部の人は宵っ張りだとよく言うけれど、本当だ。早めに店に着いて魚介料理と白ワインを頼み、彼女の登場を待ったが、一向にコンサートが始まる気配はない。薄闇がその夜の色を深めていくにつれて、ぽつりぽつりとテーブルが埋まっていった。どこかアラビア風のアップテンポなイントロに乗って彼女がステージに現れたのは、十時過ぎだった。黒のビスチェと赤のロングドレスに身を包んだ彼女は、力強く歌い出した。イタリア南部民謡のアデーラ流ポップアレンジだ。次の曲もその次の曲も、哀愁に満ち、扇情的なメロディーが続いた。時には足を踏み鳴らしながら激しく、時には語りかけるように優しく、彼女は歌い続けた。

コンサート終盤、聞き覚えのあるメロディーが流れてきたところで、テーブルから歓声が上がった。『ゴッドファーザー』のテーマ曲にシチリア語の

歌詞をつけたラブソング『燃える大地』(原題 Brucia la terra)だ。家族を守るためにマフィアのボスになり、そのために愛する女性を失った主人公の悲しみを映し出すかのような内容になっている。映画の中では男性ヴォーカルで歌われたものだが、女性の声で聞くとまた新鮮だった。なんとという痛みだろう。彼女が伸ばした指先の向こうを見つめる。けれど、そこにもう愛する人はいない。彼女の憂い顔とアコースティックギターのむせび泣くような音色に、胸が苦しくなる。燃える大地とは、失ってなおその人を想い焦がれる心の炎のことだ。その情熱的な愛の歌は、彼女にとってもよく似合っていた。

「イタリアの歌は90年代で終焉を迎えました。インターネットの普及やグローバル化でみんな同じになってしまいました。でもそんなの、つまらないですか？ 土地のアイデンティティーを守っていく、それはとても大切なことだと思っています。

私は南部の女です。だから、南部に伝わる歌を、生まれ育った大地の言葉で歌いたいのです」。イタリア南北の相違は言葉だけではない。経済格差もまた大きい。マフィアなど反社会的勢力が南部にはびこるのもこのためだ。貧しかった南部ではかつて、仕事を求めて南米や北米に移住する人たちが絶えなかった。そうした世相を背景に、9歳の時、カナダに引っ越していく子ども心で歌った『カラブリア・チャオ』がヒットして有名になった。さ

よなら、きっとまた会おうねと故郷の大地に語りかける幼い彼女の歌声に、大人たちは自らの境遇を重ね、涙したという。父親であるシンガーソングライターのエンツォ・ラファージェ(Enzo Laface)らの作品だった。以降、アデーレ・ラファージェ(Adele Laface)としてキャリアを重ねたのだが、十余年前からアデーラと名乗るようになった。どうしてなのだろう。アデーレ・ラファージェとアデーラは何が違うのかを尋ねると、彼女は「何が違うのか？」と私の質問を繰り返し、しばらくの間、真夜中の潮騒に耳を傾けていた。

「アデーレ・ラファージェは現実を生き抜くための肉体、それに対してアデーラは私の心なので

す」。歌声よりもさらにハスキーな声で、彼女は堰を切ったように語り出した。「誰もが、社会に適合するため、そこに発生する義務と問題処理とに追われて生きていかなくてはなりません。それが、アデーレ・ラファージェです。そういった『籠の中に閉じ込められた人生』から、自分自身を解き放った自由な魂がアデーラなのです」。きっと彼女は、そうありたい自分と現実の自分との乖離に気づきながら、どのように自己を実現していけばいいのか悩んでいたのだ。そして、そうありたい自分を実現しようとして名前を変えたのだ。「『燃える大地』がアデーラの始まりでした。誰もが知っている『ゴッドファーザー』の曲だからこそ、みんなの心に染み込んでいきます。この曲の力を借りて、私はこのイタリア南部という情熱の大地がはぐくんできたメロディーを、世界中の人に伝えていきたいのです」。歌姫は黒い海の向こうを見つめ、そっと微笑んだ。



【葡萄畑の向こうに海岸線が美しい】

山岳地帯に広がるカラブリアの葡萄畑は、背景の青い海岸線とひとつになって息をのむような絶景をつくりだす。一方で、その赤い山肌は荒々しく、厳しい気象条件との闘いを彷彿とさせる。生きることは、決して簡単なことではない。自分と闘いながら、同時代を生きている同志との出会いは、そんな「ワインの大地」がくれたかけがえのない宝物だ。だから私は、今日もあの人の歌を口ずさむ。自由な魂に思いを寄せて。

(ライター、 イタリアソムリエ協会/
AIS 認定ソムリエ)

イタリアげんぱつ紀行 その2

ラティーナ原発に向かう

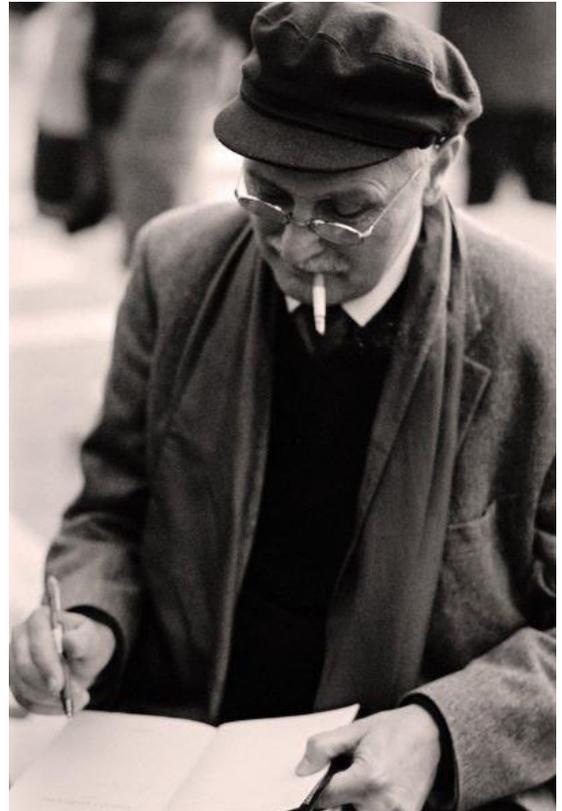
二宮 大輔

2023年2月25日、私はイタリア最古の原発があるラツィオ州ラティーナに向かった。ローマから電車で南東の分離集落ヴェツレトリまで行き、そこから中距離バスでラティーナ市内へ向かう。朝7時、ローマ中央駅テルミニとヴェツレトリを結ぶローマ＝ヴェツレトリ線は、仕事でローマに通う郊外の住民たちが多数利用しているようで、早朝ではあるものの、終着のローマに到着した電車からは、たくさんの人が降りてくる。乗客が降り終えて、ローマ発ヴェツレトリ行きに切り替わると、電車内は閑散としてしまった。その電車に乗り込み、1時間かけて終点のヴェツレトリ駅に到着すると、これまた閑散としたバスターミナルがあり、その売店でバスの切符を購入する。「ラティーナ市内へのバスはどこから出るの？」と店員に聞くと「知らない。表示を見ろ」と愛想のない答えを返された。見知らぬ小村での乗り換え、閑散とした駅、愛想のない店員。まさにイタリアの田舎を巡る旅行だなと、久しぶりの感覚を噛みしめながら、ラツィオ交通社 Cotral のバスに乗った。車窓からは広大な草原と背の高い並木が見える。今のところ原発に接近しているという物々しさはまったくくない。そして牧歌的なこの風景を眺めながら、私はようやくガイガーカウンターをローマの家に忘れてきたことに気づいた。

なんということだろう。イタリアの原発で線量を測定して記事を書くというのが、自分なりのコンセプトだったのだが、それをきれいさっぱり家に忘れてきてしまった。だが、ここまで来て引き返すわけにはいかない。それに線量測定はあくまで話のきっかけにすぎず、イタリアの原発の様子が読者に伝わればそれでいいのだ。そう自分に言い聞かせて、今一度ラティーナに想いを巡らせる。

ラティーナという名前は、これまで行ったことは

なかったが、何度も聞いたことがあった。ローマ市内から南東に約 70 キロ進んだところにあるこの町は、かのムッソリーニが開墾したことで知られている。19世紀から計画があった、広大な沼地アグロ・ポンティーノの開墾を、ファシスト党主導のもと本格的に開始したのが1928年のこと。その中心地がリットーリア、つまり現在のラティーナだ。沼地を開墾して住環境を整えるこの大事業を、ムッソリーニの大きな功績と見る向きもあるし、開墾地を訪れて作業を手伝うムッソリーニの写真は、プロパガンダの素材としてあまりにも有名だ。その一方で、沼地ゆえの疫病によって数えきれない犠牲者を出した。また労働力として北イタリアからの移民者もあり、イタリア国内の移民史の観点からも非常に重要な地域だ。



【アントニオ・ペンナッキ】

出典元:https://it.wikipedia.org/wiki/Antonio_Pennacchi

私がこの町とその歴史について知ったのは、2010年にストレーガ賞を獲ったアントニオ・ペンナッキの『ムッソリーニ水路』(Canale Mussolini)によるところが大きい。北イタリアからアグロ・ポンテ

イーノに移住して農業を営むペルツツィ家の世代を超えた歴史小説で、ファンズムに運命を翻弄されるペルツツィ家の人々の様子が、生々しく描かれている。2015年に出版された第2部と合わせると、約900ページに上る大作だ。その著者アントニオ・ペンナッキの経歴がまた面白い。北イタリアから移住した開墾民を両親に持ち、ラティーナで生まれ育つ。電子製品・通信装置メーカーの作業員として働かたわら、小説を執筆し、数々の出版社に持ち込んで拒否され、50歳にしてようやく作家デビューを果たした。その彼が『ムツソリーニ水路』の前書きで、「この本を書くために私は生まれてきた」と宣言している。アグロ・ポンティーノ開墾は、彼にとって一生をかけるテーマだった。簡略化して述べてみても、奥が深くとても面白そうなテーマではあるが、私の旅のメインはあくまで原発なのだ。



【ラティーナの町】

さて、ヴェットリ駅から50分ほどバスで走っただろうか。私はラティーナ市内のバスターミナルに到着した。鉄道駅ヴェットリと比べるとかなり大きな町という印象だ。広大な灰色のコンクリートの敷地に、乗降場が4レーンあり、併設している市の建物の壁は落書きだらけだ。行ったのが土

曜日だったせいか、施設自体は閉まっており、そこに地元の若者たちがたむろして、タバコを吸ったり音楽を聴いたりしている。過去にコレンテでラティーナ出身の歌手カル Катタを紹介する記事を書いた。彼はラティーナのベッドタウンの虚しさや喪失感を歌で表現していたが、そのイメージそのものだ。

目的地のラティーナ原発はというと、市内からさらに周辺地域を回る市バスに乗って、開墾地の一区画であるサンタ・ローザまで行かなければならない。原発の最寄りの停留所を通るバスはどうやら本数が少ない。少し離れた大通りフォーチェ・ヴェルデまでバスで行き、そこから徒歩でアプローチしよう。バスがラティーナ市のポポロ広場を通るまで少し時間があるので、市内を散策してみた。まず、原発を停止することに決めた際の議事録が収められている中央図書館は工事中で閉まっている。それならばと、書店に行って資料をさがしてみたが、こちらには目ぼしいものが特にない。先述のアグロ・ポンティーノ開墾の歴史に関する本はたくさんあるのだが、原発関係は皆無だ。30代後半だろう書店員に聞いてみると、「原発の本は見たことがないわね。当時の話を知っている上の世代じゃないと、何も話せることはないと思う」とのことだった。二軒目の書店でも同じような返事をもらい、アントニオ・ペンナッキが監修を務めた開墾の歴史本を一冊買って広場に戻った。

原発の資料は非常に乏しく、町として原発の記憶を失っているというのが、ここまでの印象だ。最古の原発として稼働し始めたのが1963年で、停止したのが1987年。現在は廃炉に向けた長い長い行程の途中にあるはずだ。そこにいたるまでにはスリーマイル島の事故、チェルノブイリの事故、そして国民投票という、欧米社会と連動するイタリア現代史のダイナミズムがあるのだが、ラティーナに深く根ざしているのは、なんといってもその開墾の歴史なのだ。後からできた原発は、ラティーナの歴史と無縁のところから突然現れ、やがて姿を消して忘れ去られてしまっている。

広場から市バスに乗って海に向かう。二月の淋しい海岸沿いをハイスピードでバスが走り、思っているよりもずっと早く目指していた停留所に到着した。交差点のバールでパニーノと水のボトル

を買い、いざ、原発へ。5 年前にイタリア中部にあるフォツソリという田舎町までユダヤ人の収容所を徒歩で見学に行ったのだが、その時と同じ気持ちだ。明らかに人が歩かないだろう側道に生えた草をザクザク踏み分けながら、4 キロほど歩いて原発の一角に到着した。ヴーンという低音が絶え間なく鳴っており、イタリアには珍しく、鉄塔を経由して電線が各方向に張り巡らされている。ここまできるとさすがに原発らしい雰囲気を出しているが、それでも付近には別荘と思いき民家や老人ホームとでも呼ぶべき高齢者向け住宅地が建っている。

金網が張り巡らされた原発敷地内には、一面ソーラーパネルが見える。余った土地で太陽光発電を行っているのか。送電業者 Terna のロゴが見える。さらに正門のほうに進むと、金網の奥に廃炉となるべき原子炉が。ついにここまで来た。正門に掲げられた看板を見ると SOGIN という会社がラティーナ原発の運営を仕切っていることがわかった。調べてみると、SOGIN というのは Società Gestione Impianti Nucleari の略で、各施設運営会社という意味だ。もともとは国営だった電力会社 ENEL の子会社として設立された SOGIN の主な目的は、核のごみの管理だ。ラティーナだけでなく、イタリアにあった四つの原発すべての運営を仕切っており、並行して廃炉作業を進めている。特に作業が進んでいるのが、いちばん古いラティーナ原発のはずなのだが、それでも核のごみの最終埋め立て地が決まっておらず、一時的なごみ置き場として、原発内で保管されている。廃炉の作業が始まってずいぶん経つが、今をもってなお、地震の心配がなく、人里離れている場所が見つからないのだ。可燃性のごみに関しては、フランスのラ・アーグ再処理工場など、他のヨーロッパ諸国に送っている。ここら辺の事情は日本と似ている。

原発は確かに存在していたし、核のごみ処理など、取り組まなければならない課題も残っている。ただ国民投票を終え、四つしかない原発は、ゆっくりではあるがそれぞれ廃炉に向かって進み、一部の専門家を除き、多くのイタリア人にとって原発はアクチュアルな問題ではなくなってしまった。それは日本との大きな違いだ。

原発というイタリアの重要課題からその心性を読み解こうという意気込みでラティーナにやってきたが、とんだ肩透かしを食らってしまった。イタリアの何もない郊外都市を訪問するのは楽しいし、実際に原発までたどり着けたことに充実感も覚えたが、自分一人で盛り上がり、場違いなことをしてしまった感覚は否めない。それでも機会を改めて残り3基の原発と、つくりかけの原発のあったモンタルト・ディ・カストロと原子力研究センターのあるローマのカザッチャは訪問してみようと思っている。そこで何か見えてくるものがあることを願いつつ。(つづく)



【ラティーナ原発】

(翻訳家、元当館語学受講生)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>